

妖術について

On Witchcraft

木下 聖三

目次

- 1 信じるか信じないか
- 2 腑に落ちるという事態
- 3 実質が形式を必要とした
- 4 いわくいいがたき実人生の味

1 信じるか信じないか

妖術とは誰にも気づかれることなく、他人に危害を加える行為である。場合によっては、加害者さえもが気づかない間に（むしろ、エドワード・エヴァン・エヴァンズ＝プリチャードのザンデ報告以来、当人にその意図のないことが、妖術の定義に含まれてすらいよう）。

予め断っておきたいのだが、私も妖術が現実に可能であるなどと信じてはいない。ここで直ちに問題になるのは「信じる」という言葉の文法である。浜本満が「妖術信仰について考えることは、特定の信念セットについて、それを信じる者と信じない者を隔てる一見して巨大なギャップについて考えることである」[2014: 11]と述べているけれども、続けて、たとえば地縛霊の存在について、自身「信じない」と表明する一方、車通りの少ない夜の峠道では、不必要に通過を急いでしまう程度に「信じられている」とも述べていて [2014: 19-20]、つまり、「信じない」事態と「信じられている」事態と

は、一人の人間のうちで併存し得るものなのである。

「信じられる」と言う時のこの語尾に注意したい。浜本は並べて「信じる」か「信じない」という具合に、能動態の言辞を俎上に載せて、「信じる」ことは（あてにするとする）選択であるという結論を導出している。その信憑性（あてにできる度合い）が半々（あるいは1%から99%の間）である場合、確かに「信じる」か「信じない」か、事は二者択一問題の様相を帯びるだろう。

しかし、事の信憑性が0%あるいは100%だったらどうだろうか。ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインはたとえば「私は手を2つ持っている」とか「大地は自分が生まれるはるか以前から存在していた」という類の信憑性100%の信念の束を「世界像」と呼び（「確実性の問題」[1975b: 31]）、それぞれは（証拠を必要とする）知識ではなく、知識を可能にするものなのだとして述べている（「確実性の問題」[1975b: 64-65]）。このような信念には選択の余地がなく（したがって能動態で言及できる事態ではなく）、「信じられている」と言うのがせいぜいであろう。大事故や大災害はこういう（信憑性がほとんど100%の）信念をも揺るがすから、人々のショックも甚大なのである。

2 腑に落ちるという事態

ここで話は私事にわたるのだが、と言うのも、私自身「信じない」事態と「信じられている」事態の併存状況に見舞われたからである。

ある日、私はバイクの自損事故により大怪我を負った。通勤途中、気づいたら転倒していたという調子で、意識ははっきりしていたにもかかわらず、どう転倒したのがどうにも理解できなかった。二次的三次的な要因ならばいくつも頭に浮かんだ。朝寝坊して時間が押していたから。通勤ラッシュでドライバーの誰もが苛立っている状況下、さらにトラックに幅寄せされたから（しかし、接触したわけではなかった）。そもそもドライコンディションで、少々乱暴な運転なら可能だったから。…などなど。これらの条件のうち一つでも欠けていたら、事故は起こらなかったように思われたのだけれども（事故はあらゆる条件が揃った時に起こるものだと痛感した）、同時に、いず

れも事故に直結する一次的な要因とは思えなかった。

それから何年か経ったある日、ふと「ある人に不義理を働いたことが事故に直結したのだ」という（考えならぬ）考えが頭をよぎった。そして、この考えは「信じる」か「信じない」という選択のプロセスを待たずに、一飛びに「あれはそうだったのだ」と私の腑に落ちてしまった。こうした「風吹けば桶屋が儲かる」式の因果などとうてい頭で追うことはできないのだが、それより先に腑に落ちてしまったのである。

ここでの「一次的な要因」と「二次的三次的な要因」とはそれぞれ「なぜ原因」と「いかに原因」とに換言することができる。浜本はこうした「原因の二類型」を棄却しているのだが、アレクサンドロ・コイレないしハーバート・バタフィールド以来の（目的論的自然観から機械論的自然観へのシフトという）科学革命観にしたがって、近代科学とは「なぜ原因」をそぎ落とし、「いかに原因」こそを詳らかにする運動なのだと思えば、とりわけ「なぜ原因」という見立てが「原因概念のあまりにも不当な拡張」である（浜本「不幸の出来事」[1989: 86]）というよりは、近代科学の原因概念が限定的であるという話なのであって、逆に（そしてレヴィ＝ストロース流に）言えば、妖術（を含む呪術）的な思考の方が少し野心的なだけだと言うこともできるのではないか。

ユベールとモースの言うごとく、呪術的思考とは「因果律の主題による巨大な変奏曲」なのであって、それが科学と異なる点は、因果性についての無知ないしはその軽視ではなく、むしろ逆に、呪術的思考において因果性追究の欲求がより激しく強硬なことであって、科学の方からは、せいぜいそれを行きすぎとか性急とか呼びうるにすぎないのではなからうか？…この観点からすれば、呪術と科学の第一の相違点はつぎのようなものになろう。すなわち、呪術が包括的かつ全面的な因果性を公準とするのに対し、科学の方は、まずいろいろなレベルを区別した上で、そのうちの若干に限ってのみ因果性のなにかの形式が成り立つことを認めるが、ほかに同じ形式が通用しないレベルもあるとするのである。

（レヴィ＝ストロース『野生の思考』[1971: 14-15]）

また、浜本は妖術の語りが出来事の個性（あるいは単独性）を言い表しているだけでなく、出来事の異常な配置（独特の表情）こそを表現しているのだ、として、やはり（「なぜ原因」を立てる）「原因の二類型」化を退けるのだが、同時に（直後に）、出来事の表情（異常性）についての語りには、ロジカルタイプの混同が生じていると診断してもいい（浜本「不幸の出来事」[1989: 81]）、そうであるならば、最初から素直に、タイプを異にする二つの原因概念（「なぜ原因」と「いかに原因」）を立てておいた方が、話の見通しが良くなるのではないだろうか。

さらに言えば、ハナ・アーレントによる「正体」(who)と「特質」(what)の区別(アーレント『人間の条件』[1994: 291頁])と同様に、「なぜ原因」(why)と「いかに原因」(how)の区別もまた、(タイプを異にするところの)単独性と特殊性の区別に重ねて見ることができるだろう。

その考えが頭をよぎるとほとんど同時に、主客を入れ替えた別の事案が頭に浮かんだ。あれやこれやよりずっと前に、知人がバイク事故を起こしたのだが、それもまた(一言で言うと)私に対する不義理が原因だったのであり、こちらの場合「私の想念が事故を発生せしめた」というわけなのである。

こうなると(我ながら)信憑性0%のオカルトである(私自身の信念に対してであれば、「オカルト」という言葉遣いも許されよう)。できるだけ抑制的な表現を与えるとしても「あてこみ」といったところだろう。それくらい「信じられない」(「信じる」という選択ができない)事柄なのだけれども、しかしながら、何より先に腑に落ちてしまった(「信じられている」事態と相成ってしまった)のである。

3 実質が形式を必要とした

(冒頭に掲げた定義に照らすならば)これは多分に妖術的な思考だろう。私が元々こういう体質の持ち主だったのかどうかはわからない。とにかく両事案が相互に根拠となって、この信念セットが強化されてしまったようなのである(「ようなのである」というのは、主体的能動的に「信じる」という選択をした覚えはないからだ)。とはいえ「妙な観念に呪縛された」というよりは「(あれこれから)自由になった」心持ちがするから不思議なものである。

あの自損事故は私(だけ)にとってしばらく大事件だったのだけれども、かの信念が腑に落ちてしまって以来、事故は平板な人生の中に埋め戻され、今や語るまでもない日常茶事と化した感すらある(自損事故自体はありふれていよう)。一般に(信憑性100%の)信念をも揺るがすほどの事故に見舞われた場合、それを(証拠を必要とする)知識の層に埋め込むことは難しく、信念の層まで深堀りをすることによって、ようやく処理され得る、という話

なのかもしれない。

さらに抽象的に換言するならば、これは「実質が形式を必要とした」という話なのではないだろうか。浜本が参照する（そして全人類学徒が反芻すべきだとされる）「これが人間の生というものだ」というウィトゲンシュタインの言葉も（「フレーザー『金枝篇』について」[1975a：395]）、後年「生活の形式」（Lebensform）という鍵概念に収斂していくものとして読まれるべきで（浜本も「生の形」と言い換えている [2001：91]）、この意味で、あれらの奇談はむき出しの実質に与えられたフォルムであったように思われる（ここで自ら「奇」談と形容してしまっているあたり、まだまだ平らに均しきれではないわけだけれども、同時に、「そんなの、とうてい信じられない」という他方の性向を無理に否定しても仕方ない、とも思うのである）。

4 いわくいいがたき実人生の味

そして、「信じない」事態と「信じられている」事態との（あるいは知識と信念との）この撞着こそが「いわくいいがたき実人生の味」というものなのではないか。「いわくいいがたき実人生の味」とは、プロニスラフ・マリノフスキーが記した「the imponderabilia of actual life」という言葉に対して、佐藤俊夫が施した意識である。

人類学者マリノフスキイに the imponderabilia of actual life というたいへん味のある言葉がある。直訳すれば「実際生活の不可量なもの」ということであろうが、「いわくいいがたき実人生の味」とでも意識してみたらどんなものであろう。マリノフスキイはこの言葉によって、人類学の調査がとかく公式的な祭儀とか儀礼とかにばかり注目して、断片的な日常茶事がそれに劣らず大切なことを見落としがちなのを注意しているのである。

（佐藤『習俗』[1966：8]）

この言葉には、まず増田義郎によって「実生活の不可量的部分」という直訳が与えられ（マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』[2010：56]）、他にはたとえば関口時正によって「現実生活の測り知れぬ、諸々の事柄」と訳されるなどした（関口『ポーランドと他者』[2014：229]）。また、箭内匡が「imponderabilia」という語について、改めて語釈を施している（箭内『イメージの人類学』[2018：57]）。

話が脇道にそれるようだが（しかもマリノフスキー自身が以下のように規定しているわけでもないのだが）、アクチュアル（actual）の対義語はバーチャル（virtual）であり、したがって、アクチュアル・ライフに対しては、バーチャル・ライフというものが想定され得る。

そこで思い起こされるのが（話がさらにそれていくことになるけれども）、山口昌男の描くスタニスワフ・イグナツィ・ヴィトケヴィッチの姿である。生真面目なマリノフスキーとは対照的に、ヴィトケヴィッチは土地の人とすぐに馴染んでしまう。「これではどっちが人類学者かわからない」（山口『文化人類学への招待』[1982：13]）。

されど、ヴィトケヴィッチが見たり書いたりしたのは、バーチャル・ライフの方だったのではないか（これは「彼が劇作家だ」ということでもあるだろう。ただし「いずれの作品も絵空事にすぎない」という否定的な意味合いにおいてではない。バーチャルには「本質」という意味もあることに留意されたい。館璋「バーチャルリアリティとは何か」[2002：22] 参照）。

対して、生真面目なマリノフスキーだからこそ、「信じない」事態と「信じられている」事態との間に留まって、人々の生活の実相（アクチュアルな側面）に注意を向け続け得たのではないだろうか。

二人は訣別した。山口に言わせれば、単に個人的な理由だけで別れたのもなかった。けれども、それが直ちに互いの（特に理論上の）必要性を否定する証拠とはならないだろう。

いいかい、人生は、僕等が自己という素材から創造する、傑作、じゃなければ茶番劇なんだ（……）藝術は、君の場合、そのための主要な手段に過ぎないということ、分かるかい、（……）唯一本質的なのは、生それ自体な

んだよ。

ブンゴ [=ヴィトケヴィッチ] は (……) 生命力を獲得する手段としての
藝術という考えは、彼にとっては殆ど唾棄すべきものであるにも拘らず、
公爵 [=マリノフスキー] の言葉が、彼自身日頃見失いがちだった、生の
形而上学的不思議さについての感覚を、再び彼の内に目覚めさせるのを感じ
ていた (……)。

(ヴィトケヴィッチ『ブンゴの622の墮落あるいは悪魔的な女』
訳文は関口『ポーランドと他者』[2014: 231] より)

バーチャリティが先かアクチュアリティが先かといった鶏卵問題はさてお
き、両者が相補的な関係にあるのだとすれば、妖術 (さらには呪術、邪術、
妖術を含む総称としての儀礼) はいわば (実質を欠いた) バーチャル・ライ
フなのであり、(実質としての) アクチュアル・ライフにフォルムを与えるも
のなのではないだろうか。

レヴィ=ストロースもこう述べていた。「呪術は本体に先立つ影のようなものであって、ある意
味では本体と同様にすべてがととのい、実質はなくても、すぐあとにくる実物と同じほどに完成さ
れ、まとまったものである」[1976: 18]。

参考文献

アーレント (Hannah Arendt)

1994『人間の条件』(志水速雄訳) ちくま学芸文庫

ウィトゲンシュタイン (Ludwig Josef Johann Wittgenstein)

1975a「フレーザー『金枝篇』について」『ウィトゲンシュタイン全集6』(杖下隆英訳) 大修館書店

1975b「確実性の問題」『ウィトゲンシュタイン全集9』(黒田亘／菅豊彦訳) 大修館書店

佐藤俊夫

1966『習俗 倫理の基底』塙新書

関口時正

2014『ポーランドと他者 文化・レトリック・地図』みすず書房

館璋

2002 『バーチャルリアリティ入門』 ちくま新書

浜本満

1989 「不幸の出来事 不幸の語りにおける「原因」と「非・原因」」 吉田禎吾編『異文化の解説』
平賀出版社

2001 『秩序の方法 ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』 弘文堂

2014 『信念の呪縛 ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』 九州大学出版会

マリノフスキー (Bronislaw Kasper Malinowski)

2010 『西太平洋の遠洋航海者』 (増田義郎訳) 講談社学術文庫

箭内匡

2018 『イメージの人類学』 せりか書房

山口昌男

1982 『文化人類学への招待』 岩波新書

レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss)

1976 『野生の思考』 (大橋保夫訳) みすず書房